

## 戦後台湾俳句小史（二） 台北俳句会の誕生と会長・黄靈芝の登場

磯 田 一 雄

### 1. はじめに

戦前期台湾には独立した俳句結社が短歌結社と競い合うように多数あったが、みな日本人中心で、主宰はすべて日本人であった。戦後はそのような結社の中心であった日本人はすべて台湾を去った。それにより俳句や短歌の結社はすべて崩壊した。その上台湾を接収した中国国民党政府は日本語禁圧政策をとった（と通常いわれるが、その実態は以下に見るように、たいへん複雑である）。そのため日本語で俳句や短歌を詠むこと自体タブー視されるような事態となった。台湾の短歌や俳句は1960年代に至って次第に復活・再生するようになるのだが、それまでの期間の短歌や俳句の実態はまさに謎である。

確かな事実は、戦前期に主として中等学校での国語教育を通じて、さらには短歌や俳句の結社に参加して、俳句や短歌の教養を獲得し、戦後の国民党支配による中国化（北京語使用の強制）に馴染めなかった台湾人が「日本語人」となり、短歌や俳句が復活する基盤となったことである。やがて国交断絶以前に来台した日本人を媒介として、日本の短歌結社や俳句結社と接触するようになり、その支部が台湾に結成され、次いで自立するという形で、台湾人を中心とする短歌会や俳句会が生まれるのである。

1960年代末より、指導的台湾人を中心に、そこに在台日本人（ほとんどが台湾人と結婚した日本人妻）が参加する形で、新しく短歌や俳句の結社が興されるようになった。台北短歌研究会（1967年、間もなく「台北歌壇」、2004年より「台湾歌壇」）、台北俳句会（1970年）、さらに遅れて台北川柳会（1994年、2002年より「台湾川柳会」）などが生まれ

たのである<sup>1)</sup>。

あまり知られていないが、戦後台湾の俳句結社や短歌結社の成立には、日本の俳句結社・短歌結社がそれぞれかかわっている。これらの結社の誕生に当たっては、最初期には『からたち』や『七彩』など、日本の短歌結社や俳句結社が母体ないし媒介となっていた。台北短歌研究会は「からたち台北支部」として、台北俳句会は「七彩台北支部」として発足している。しかも発足当初は台北短歌会と台北俳句会のメンバーが相互に重なっていたのである。

現在の台湾俳句を代表する台北俳句会は、先行して創立された台北短歌研究会（台北歌壇、現・台湾歌壇）が後述のように「俳句もやろう」という形で発足している。台北歌壇には戦前期に既に文芸家や歌人として活動していた、郭水潭、巫永福、頼天河、周金波、蕭翔文などが、創立当初からかなり参加していた。主宰の孤蓬萬里は戦前短歌結社に属したことはなかったが、旧制台北第二中学校や旧制台北高校時代に短歌を習得していた。

台北歌壇と重複する形で成立した台北俳句会の最初期のメンバーは、すべて台北歌壇の会員であり、多少とも戦前からの台湾俳人らしい人で創立当初から参加したのは呂鵠城（本名呂生地。台中の『竹鶏』の主宰・阿川燕城の一番弟子とされ、俳号も師に因む）くらいだと言ってよい。会長になった黄靈芝（本名：黄天驥。1928-2016、行年 87 歳）にしても、俳句を学んだのは戦後であり、戦前の台湾の俳句界とは直接関係がない。日本統治期には、特に中等学校教育において、明らかに俳句よりも短歌の方が、皇民化教育とのかかわりで重視されていたことが、その背景にあったと考えられる<sup>2)</sup>。しかし創立当初の台北俳句会会員に戦前期からの俳人が全くいなかったわけではなく、また多くの歌人は多少とも俳句の心得もあったと考えられる。そうであったからこそ短歌会を土台として俳句会も生れたのであろう。このような事情からして戦後の台湾では、短歌のほうが俳句より戦前とのリンクが辿りやすいと同時に、短歌・俳句相互の人脈的な関連が重要になってくるのである。戦後台湾の俳句は、特にその初期の段階においては、短歌との密接な関係に注目する必要がある。

## 2. 日本語禁止の実態

### ——批判の武器としての日本語による表現——

日本の植民地統治から解放された台湾人が「これで自分たちの時代が来た」と狂喜し、接収に来た中華民国政府を大歓迎したことから戦後台湾は始まる。この時点までは台湾人の「祖国」(中国)に対する「漢民族意識」は堅持されていたとみられよう。しかし台湾を接収に来た国民党軍を歓呼の声で迎えた台湾人の期待を裏切るような事態が次々と発生し、中華民国政府の統治開始間もない1947年2月28日、本来の台湾人(本省人)と大陸からの新参移住者(外省人)との間で武力衝突事件が起こった(いわゆる二二八事件)。この事件は大陸からの援軍による武力鎮圧で終息するが、その後の多数の台湾知識人虐殺、38年間に及ぶ戒厳令の発布などで、本省人と外省人との間に拭いがたい不信と亀裂が生じた。この事件の背後には、日本語から北京語への国語転換問題が重要な要因としてあった、と陳培豊は言う<sup>3)</sup>。

当時の台湾の言語事情を見ると、日本統治期の熾烈な「同化」政策の結果、1943年には国語(日本語)を解する者の比率は80%にもなっていたとされている<sup>4)</sup>。若い世代になると固有言語の台湾語(主として閩南語。中国語系だが、北京語とは大きな隔りがある)が満足に話せず、日本語の方が流暢という状況だった。いっぽう日本統治期の漢詩・漢文の抑圧の結果、北京語を知るものは少数だった。

国民党政府の長となった陳儀は、かねてより台湾接収後即刻着手すべきは、国語(中国語=北京語)・国文を教えて台湾の同胞に祖国の文化を理解させること、つまり日本語から中国語への国語転換であると考えていた。そのためには日本語を台湾社会から排除するのは必至とされた。日本語廃止の実施計画を立て、正式の排除実施は接収一年後の1946年10月としたのだが、国語転換の混乱の兆しはこの移行措置の時期に胚胎していた。それは日本語を除いて当時の台湾で全島住民が理解できる言語がなかったからである<sup>5)</sup>。また国民党政府は、台湾人が日本統治期に「同化」教育を受容したことを指して、「日本化」はすなわち「奴隸化」であり、「中国語」「中華文化」によって「浄化」される必要があるとし、またそれゆえに台湾人を権力機構から排除したのだが、この「奴

隷化」発言に対して台湾人は一斉に反発した。彼らは日本語を習得して日本に「奴隷化」されたのではなく、それは世界の情報、知識を得るためであって、日本語は彼らにとって単なるコミュニケーションの手段、道具にすぎないと考えていたからであった<sup>6)</sup>。1946年10月25日新聞・雑誌における日本語の使用が禁止された。これは日本語を通じて知識を獲得したり、表現したりすることができなくなることであり、強い反発を招いた。しかし政府は台湾に残された日本文化の残滓を取り除くために、日本の映画や日本語の出版物を取り締まり、焼却処分したりした。

台湾人も解放直後は熱心に中国語を学ぼうと志して、到る所で講習会が開かれていたのだが、やがて国民党政府に対する不満や反感が掻きたてられるようになり、中国語学習熱は急速に冷めていった。この性急で強引な日本語廃止と新しい国語国文普及運動をきっかけに、台湾人の積み重なる不満が爆発し、1947年2月の二二八事件に至ったのである<sup>7)</sup>。

戦後台湾俳句界の第一人者であり、創立以来45年余にわたって台北俳句会会長だった黄靈芝（1928-2016）は、「日本は敗戦によりゼロから再出発したが、韓国は一旦小数点下まで落ちてから這い上がった」という小田実の警句をひいて、「この点台湾はもっと惨めである。昭和二十年なる年号が民国三十四年だと呼びかえられた日から、人々は忽ち唾となり聾となり盲となった」といっている<sup>8)</sup>。日本統治期には日本語が「国語」とされ、母語である台湾語は抑圧された。日本から「解放」されたと思ったら、今度は北京語が「国語」となり、台湾語も依然として日本語同様に抑圧されたのである。この影響の受け方は、数年の世代の差によっても大きく異なるが、この言語環境への適応問題が、戦後台湾における短歌や俳句など日本語短詩文芸の復活にも密接にかかわっている。日本語教育を受けた世代が日本語を話すことを止めなかっただけでなく、文学でも日本語が生き残ったのである。いくつかの短歌会、二つの俳句会、さらに川柳会も生まれ、現に活動を続けている。これは奇跡のように思われるかもしれない。

実は、日本語使用禁止令が出されたことによって、直ちに日本語が使われなくなった、というほど事は簡単ではなかった。法令によって新聞や雑誌などの日本文は排除できても、日本語使用そのものを絶滅させることはできなかった。蔡茂豊によれば、実際に「絶滅」させられたのは実は「日本語の教育」であった。蔡はこう述べている（括弧内は引用者

が補う)<sup>9)</sup>。

(二二八事件以後)台湾政府は、台湾人の日本語使用を一段と厳しく禁止し、中国語教育を励行した。……(ところが)予想もしいことが起こった。中国語を一生懸命勉強していたはずの台湾人がところ構わずに日本語を再び使用しはじめたのである。

と言うのは、戦後中学が数多く設置され、大勢の台湾人が中等以上の学校に進学することができた。教師もほとんどと言っていいほど日本教育しか受けていないだけに、日本語が逆にはやり出すという皮肉な現象を起こしたのである。

政府当局は躍起になって日本語使用禁止令を出した。しかし逆に(火に)油を注ぐことになり、台湾の至るところ日本語が聞けたのである。

政治抗争事件(二二八事件)をきっかけに数多くの人が殺害された。……それに伴い中国語教育が徹底的に励行され、日本語教育は正に暗黒期と言うほかない時期を迎えたのである。

要は、日本語禁止令が出たからと言って、台湾の日本語世代が簡単に日本語使用を放棄したというわけでは必ずしもないどころか、逆に隆盛になったこともあったのである。ただ中国語教育が徹底して行われたということは、とりわけ日本語教育にとって厳しかった。蔡はその時期を1947年～1963年としている。しかし1963年頃から転換が起こる。それまで18年間も絶たれていた日本語教育が大学の一学科として専攻されるようになったばかりでなく、軍事学校にも日本語クラスが設置されるようになったのである。中国文化大学(1963年)、淡江文理学院(1966年)、国防語文学学校(1968年)、輔仁大学(1969年)、東呉大学(1972年)などがそれである。

これは、1967年に台北短歌研究会(後に台北歌壇、現・台湾歌壇)が成立し、これを母体に1970年に台北俳句会が発足していく過程と重なっているように見える。だが後で見る台北俳句会長・黄靈芝の回想にもあるように、短歌や俳句の活動は、その時俄かに再生したわけではなく、その少し前から徐々にその動きが始まっていたようである。その時期は1950年代の半ばころと見られる。その背後に何があったのだろうか

か。

戦後台湾で日本語の短詩文芸がよみがえった事情を、黄智慧は短歌と川柳を中心にして、要約すればおよそ次のように解明している（番号は引用者の付加）<sup>10)</sup>。

(1) (戒厳令下で) 公式の場において、表現の自由が奪われたため、彼らは最後の手段として日本語で、しかも目立たない、暗喩や隠喩が多く用いられる日本語の詩文に「植民されるもの」としての心情を寄せた。これを黄智慧は「二重植民後の抵抗の型態」（前の植民者から得たものをもって、後の植民者に抵抗するという心理的な転折）と呼んでいる。

(2) 台湾のこれらの日本語詩のサークルの作者たちは、すべて戦前の学校教育の中で、また彼らの人生の青年期において、これらの文学形式に接したが故に、これらの詩を作る能力が備わっていた。

(3) しかしそれは多くの犠牲を伴うものであり、それは風刺やユーモアの影に付き添う「悲哀」として表現される。この悲哀は次の四つに分類される。①国籍を翻弄される悲哀、②誤解される悲しみ、③世代間でコミュニケーションできない悲しみ、④世代間で伝承できない悲しみ。

これらは主として短歌と川柳に基づいた議論であって、俳句はあまり例に取り上げられていないが、戦後台湾ではまず短歌会が生まれ、その基盤の上に俳句会が生まれ、さらに両者を基盤として川柳会も生まれたのであるから、結果的にすべてのジャンルを包摂していることになろう。

ここで注目されるのは、(1) 台湾人による戦後の日本語使用を——したがって日本語文芸活動も——「抵抗の武器」だったとする見解である。日本の敗戦によって「我々の時代がやってきた」という期待は間もなく裏切られ、台湾人は国民党政権による「第二の植民地化」を体験させられることになった。これに対する一つの抵抗として意図的に日本語を話し、日本語で表現することが始まった、ということの意味する。確かにこれを実証するような作品が、川柳や短歌には存在する。

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議さ 黄得龍

日本統治下の日本語学習は「止むを得ず」行ったものであるのに対し、戦後の台湾社会では、日本語で、しかも俳句や短歌で表現すれば、日本語を解しない国民党員（通称：外省人）には容易にわからないので、こういう表現活動が自主的に起こったのだということである。

既に日本統治期に、日本語は「新世代台湾知識人」の支配者に対する「批判の武器」になっていたと、陳培豊は指摘している<sup>11)</sup>。

大正期になると、「同化」統治の下に、日本語教育の洗礼を受けた新世代知識人が大量に誕生する。彼らは日本支配下の差別、矛盾に開眼し、やがて抗日民族運動の主な担い手になっていく。日本語を自在に操る新世代知識人の誕生によって統治者に対する台湾人の抵抗は、前世代の林獻堂らのように自文化に拘泥する域を脱して、活字媒体の作用によって周到、かつ広範に展開していく。これにより台湾人の民族抵抗運動は大きく様変わりをし、新しい局面を迎えることになる。新世代台湾知識人の支配者に対する批判の武器になったものは、外でもなく「日本語」そのものであったからである。

藤井省三はベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」理論に基づき、「皇民文学」を核として台湾ナショナリズムが形成されたと論じている<sup>12)</sup>。類似のことは戦後の俳句や短歌などについてもいえるであろう。戦後の俳句や短歌も台湾人にとって「批判のメディア」になり、彼らはそれによって「新しい人間」になりえたのではないかと考えられる。だがそれは「日本化（日本語教育）＝奴隷化」と決めつける国民党政府には通じなかったのである。

### 3. 台北俳句会長・黄靈芝の俳句事始め

——「軍民導報」文芸欄・相思樹会・  
『雲母』への投句——

戦後台湾における俳句活動を代表するのは、「台北俳句会」である。台北俳句会は日本俳壇の支援ないし日本俳人の参加はあったものの、台



湾俳人が主体となり、独立した活動として行われてきた。台北俳句会はその創立から2016年3月に逝去するまで45年余にわたり一貫して会長であり、カリスマ的な指導者であった黄靈芝（1928-2016）の存在を抜きにして語りえない。台北歌壇（当時）の主宰・呉建堂（孤蓬万里）は『台湾万葉集・続編』で黄靈芝の短歌について、冒頭で「遁世も易きに非ず高僧が帳簿を抱へ税務署に行く」「野良猫に餌をやりしが運のつき、子をひきつれて遷り来るとは」の二首を「諧謔と風刺の利いた詠みぶり」と評している。さらに「一般にユーモアに富み、時にヒューマニティーを含むような傾向」や「口語的な発想に長け、庶民的な歌」の数々を紹介したのち、こう述べている<sup>13)</sup>。

黄靈芝さんは本名黄天驥、靈芝はその号である。もともとは「まんねんだけ」といわれる鑑賞用の菌類の名であるが、枯木に寄生して質は堅、腐朽せず瑞草あるいは仙草と称される。病弱でありながら、絵画・彫刻・彫刻・文学と芸術生活に専念し、園芸・畜犬などにも手を染めて、剛健に生きていっている黄さんの姿を如実に表している号である。氏は台南の望族の出で、台南二中を出て<sup>14)</sup>、台大文学部に進み、外国文学を専攻されたが、病のため中退のやむなきに至り、幸いにして親譲りの富を活用して、療養しながら上記の如く芸術生活一本に身を投ずるところとなった。氏は……筆者の二つ年下であり、同年配のせい、いろいろな面で筆者と共通な考え方をもっている。筆者が日本文の短歌集を出したあと、黄氏も小説・随筆・詩・短歌・俳句などの作品をまとめて五冊の作品集にされた。

黄靈芝は呉も認めるように、まことに多能多芸な人であるが、この外に玉の研究家としても知られ著書もある（彼の著作については末尾の「黄靈芝著作目録」を参照されたい）。また呉は「二つ年下」なだけだから「同年配」と言っているが、日本統治末期のこの二年の差は意外に大きい。黄智慧の指摘するように、一般に台北俳句会の会員はその多くが日本統治期に、主として中等学校での学習を通じて、短歌や俳句の初歩を身に着けているのに対し、黄靈芝の俳句の習得・練磨は、戦前期とのつながりがほぼ皆無である。台北歌壇の主宰・呉建堂が旧制台北第二中学時代に川井駒太郎、旧制台北高校時代に犬養健から受けたような指導



ないし講義を、黄靈芝が学校時代にほとんど受けていないことは確かである。これは僅か二年の年代差によるものでもある。それでは戦後、台湾の日本俳人や俳壇が日本に引き揚げてしまった後に、どのようにして俳句に接近したのであろうか。黄は次のように言う（括弧内は原文）。

政府は公的に日本語を禁じたが、そうなると台湾人は新聞を読まなくなり、政府が何をしているかさっぱりわからなかった。殊に山の先住民ら。そこで政府は特例として『軍民導報』とよぶ日本語新聞を発行した。永続はしなかったものの私の自分史的には一つの燈を掲げてくれた新聞である。そこにささやかながら文芸欄があり、当時略血して天井ばかり睨んでいた私に「仲間」を贈ってくれたのだった。詩や文を投稿していた若者が数人集まることになり、私たちは一つの文芸の会をつくった。病床にあった私が幹事を務め、月に一度私が題を出し、または自由題で作品を私に送ってもらい、これを綴じて皆に回覧する、という方式のものであった。会には別に名称はつけていない。内容は俳句、短歌、詩、コントにわたり、漫画をよくする人もいた。総勢は当初九人だったと覚えている。のち一人減り二人減りして最後に……四人となったが、一九六四年に台湾における最初の（多分）中国文自由詩社『笠』が発足した際に……実質的に会は解散した。……戦後の台湾における最初の日本文による文芸（俳句を含め）の会だったのではなかろうかとも思う。少なくともその一つである<sup>15)</sup>。

これは黄靈芝にとってきわめて重要な文芸活動体験だったと思われる。彼は戦後間もない、未成年のころ結核を患い、十六年間もほぼ病床で過ごした挙句、医者からはもうこれ以上治療しても無駄だ、とまで言われていたのである。岡崎郁子によれば、黄靈芝が詩を投稿したことがきっかけでこの会が生まれたのは、1951年（23歳）のことだという<sup>16)</sup>。約10年ほど続いたことになる。主なメンバーは、黄靈芝のほかに、錦連、羅浪、謝喜美、黄世雄、周香山がいた。最後まで残った四人とは、黄靈芝、錦連、羅浪、謝喜美である。黄靈芝の「ふうちゃん」「紫陽花」「輿論」などの日文小説の発表はこの会と関わりがあるようだ。

同時にこうしたいきさつから、彼がなぜ中国語に移行せず、日本語で

の創作に専念するようになったか、その契機もうかがえる。戦後初期の台湾では中国語学習の機運が起こり、多くの作家が日本語から中国語での創作に移行していた<sup>17)</sup>。黄靈芝も一度は中国語の習得を考えたのだが、彼は生来の病弱で、前述のように19歳の時に初めて咯血した。当時結核はまだ死病であった。彼は自分の死を予見していた。書きたいことはたくさんあるが、これから中国語を学んで、文芸作品をなすまでに習熟するには、寿命が足りないのではないかと彼は恐れた。「しかし考えて見ると一つだけ方法があった。日本語で書けばよいのだ。名作であれば日本語であろうとエチオピア語であろうと、名作は名作である」。無論日本語圏から離れ、中国語圏になった台湾で読者は得られないだろうが、「名作でさえあれば、どこかで誰かが残してくれるものだ。……名作は後世に至っても名作だ。中国語で書こうと日本語で書こうと、そんなことには関わらない。それに翻訳という手だてもある」と彼は決意したのである<sup>18)</sup>。

これは先の黄智慧が指摘する「二重植民後の抵抗の型態」としての日本語での創作という動機とは、かなり隔たりがあるようである。ここに黄靈芝の、政治主義的でない本来の「日本語文学」作家たるゆえんがあると思われる。黄靈芝の作品はほとんどすべて日本語で書かれている。自ら中国語に翻訳して、1970年第一回呉濁流賞を受賞した「蟹」を例外として、彼は自分の日本語作品を中国語に翻訳したい、という申し出をすべて辞退しているという<sup>19)</sup>。これは陳培豊の指摘するように「実用語学」としての日本語の立場に立つことによって初めて可能になったのである。呉濁流のいうように日本語そのものは良し悪しに関係ない、単なる「道具」と見ていたということである。これは黄靈芝俳句観の基盤にもなっていることである。ずっと後のことだが、彼は次のように言う<sup>20)</sup>。

台湾人が日本文で綴る作品は一体日本語文芸の範疇に入るのか、それとも台湾文芸なのか、ということをよく問われる。この時、私はインド人の書いた英文詩は英国の文芸なりや、と問い返す。私個人としてはフランス製の絵の具を用いた梅原龍三郎氏の絵をフランス美術だと思わないし、ロッキード社から飛行機を買い入れた日本自衛隊がアメリカ軍になるとも思えない。工具に本質を左右するほ

どの能力があるとは思えないからである。

黄靈芝は数年後、この会と並行して台北で行われていた俳句の会「相思樹会」に入会し、やがて俳誌『雲母』に投句するようになる。

……1954年頃だったらしい。当時、日本勧業銀行の台北支店長だった下村非文氏<sup>21)</sup>が日本大使館や商社の日本人を集め『台北相思樹会』を創始した。私が誘われてこの会に入ったのは確か1956年のことで、この時すでに下村氏は却任帰国しておられ、『馬酔木』の会員だった竹下宏（俳号は紗帽。台北近郊の紗帽山にちなむ）氏が指導して下さっていた。……会員は十名ほどで、台湾人は許玉燕（画家）と私の二人だけだった。……そのようなある日、『雲母』の同人だった亀岡嶽水氏をお迎えした。氏は私の句を見て「君は『雲母』の人だ」といわれ、帰国のあと数々の本を送って下さった。これが縁で私は『雲母』を購読し、投句をはじめた<sup>22)</sup>（括弧内は原文）。

『雲母』は飯田蛇笏によって創始された甲府に本部を置く句会であった。亀岡によれば「その夜、五月二十四日豪雨と夜蔭の中をめげず、旅人嶽水のための歓迎句会に集まってくれた人達……今後この相思樹会が《雲母台湾支社》として、おなじ道を生涯歩むことになったことは何よりの喜びであり、感激である」とある。この時の参加者八名のうち六人の句が五句ずつ掲げられている。唯一の台湾人参加者だった黄靈芝の句は次の通り<sup>23)</sup>。

マンゴーの豊収近し風の中	黄靈芝
廟は雨後臺の蛇を旅に見し	同
器用げに蚯蚓はねたる小涼しさ	同
パンの木の廃墟ながらに昔のまゝ	同
寝不足の眼に蜘蛛の巣の日をちらす	同

これらの句のうち、第1句は下五を「蟻騒ぐ」と直して、また第3句はそのまま、後に『黄靈芝作品集 2』（私家版、1971年10月）に収録されている。この二句が選ばれたのは句意が明白だからだろう。他の句

はやや幻想的で分かりにくい。

回想録にありがちのことだが、上の黄靈芝の記憶には誤りがある。亀岡の記事によれば、黄靈芝が雲母に「入会」したのは、1955年5月24日の「嶽水歓迎句会」以降ということになる。黄靈芝の句が『雲母』に載るのは1956年1月号からであるから、当然1955年秋ごろまでに入会していなければならない。したがって、黄靈芝が「相思樹会」に参加するようになったのは、1954年であったかもしれないが、「雲母入会」は1955年と考えるべきであろう。そして彼の俳句力を鍛えるのに、いちばん関わりがあったのは『雲母』への投句による訓練だったのではなかろうか。

靈芝が『雲母』に送った俳句の内、どんな句が入選していたのだろうか。実際に「台北 黄靈芝」の名で句が載るのは同誌昭和31（1956）年1月号から33（1958）年9月号までで、全て飯田蛇笏選の「春夏秋冬」欄に掲載されている。掲載号と採られた句数は、昭和31（1956）年1月号～32年1月号に毎号2句ずつ（ただし10月号1句、11月号3句）、昭和32（1957）年3月号1句、同年6月号2句、同年7・8月号各1句、昭和33（1958）年6～8月号各1句、同年9月号2句、の計36句である。

『雲母』に掲載された黄靈芝の全句を見てみよう。これらの句のうち\*印の句はすべて『黄靈芝作品集 2』に収録されている。

- 昭和31年1月号 新涼や雲華奢めきて内湖晴れ\*  
台北 黄靈芝（以下同じ）  
註 内湖は台北近郊の山村  
無口なる尼淋しさよ野分吹く
- 2月号 懸崖の菊正庁に塵止めず\*  
木の葉髪梳きつ帰郷の念篤し
- 3月号 波どよむ磯や色なき寒に立つ\*  
聖誕樹バス小忙しきネオン街\*
- 4月号 寒流の襲ふ兆あり夜汽車待つ\*  
鳩時計は五時に止りて朝の凍て\*
- 5月号 浪はこゝ寒波に挑む蘇澳灘  
細雨香をこめて明るし木の芽ぶく\*

- 6月号 春寒や客吐き盡す湯場の汽車\*  
牛刀の鈍き光や胡地の春\*
- 7月号 寡に慣れて古花器の佝僂に春惜しむ\*  
暁が粹に五月となりし珊瑚市
- 8月号 卯月尽爪小重さに喪の疲れ  
喪の卯月愚に似て鸚鵡わめくなり\*
- 9月号 世に破れ巷に鬪魚の性を愛づ\*  
声もなく溶くる他なき花氷
- 10月号 空港の大沈黙も草いきれ\*
- 11月号 秋蟬の夜も声しぼる墓地地帯  
水甕の罅に響きて秋の鐘  
人妻の哀歎ほのか遠花火\*
- 12月号 豊頬の笑みかがやかに蘭花剪る\*  
水澄みて蘭苗萌ゆる旭の光
- 昭和32年 1月号 医者の手脈青々と朝寒し\*  
風落ちて月光滲む地の湿度
- 3月号 音たて、寒流来る夜の愛語
- 6月号 転生を泣いて論して夜半の凍て  
暉は墓碑を離れて冷める天の風
- 7月号 柎檀の雨明るさに犬葬る\*
- 8月号 鳶若葉雨後教堂に飛燕鳴く
- 昭和33年 6月号 雨中をネオンと柳絮散り行ける
- 7月号 藤は午に金環蝕は地に盈てり\*
- 8月号 蚊遣りして女後妻の座に寧し\*
- 9月号 簾卷く老ひは寡黙を運命とし\*  
龍眼樹に天を与へて農家閑\*

全体として、淡々と説明するような一物仕立ての句を嫌い、明確な切れのある二章体で、繊細な感覚と付きの適切さを狙った句の多いことが分る。それによって読む者に発見を促し、新鮮な意外性を感じさせる効果がある。また人事句よりも自然を詠んだ句のほうがずっと多い。これは『雲母』に載った句全体について、特に二句欄と三句欄に見られる特徴でもある。台湾的と思わせるような表現は、「内湖」「蘇澳灘」のよう

な地名と、季語としての「龍眼（樹）」くらいで僅かである。漢語的表現も「正庁」「胡地」「蘭苗」「転生」くらいで多くはない。

これらの句のうち『黄靈芝作品集 2』に収録された句について、黄靈芝は次のように手を入れている。「波よどむ」の句は「波よどむ磯に色なき寒の入り」、「鳩時計」の句は「鳩時計止まって今朝は摂氏五度」、「牛刀の」の句は「牛刀の鈍き光も胡地の春」、「簾卷く」の句は「老ひ」を「老」にそれぞれ直している（「老い」を「老ひ」と表記するのはこの句だけでなく、『雲母』に載った他の作者の句も同様である）。「波よどむ」と「牛刀」の句は切れ字「や」を嫌ったかのようである。「鳩時計」の句の「朝の凍て」を「今朝は摂氏五度」と直したのは、句想の具体化ではあるが「摂氏五度」と「凍て」が同格のように見えるのはいかにも台湾らしい。「龍眼樹」の句は「龍眼に天を与へて農閑に」と直しているが、台湾の農村らしい風景であり、龍眼樹が大木となることから「天を与へて」の思い切った誇張が小気味よい。

「新涼や」の句は、秋めくようになって夏の入道雲のような堂々たる雲から、鯛雲のような繊細な感じの雲に変ってきたことを捉えている。「暎が粹に」の句は意味がわかりにくい、後の句には「暎」の代わりに「旭」を充てている。

「木の葉髪」の句は抜け毛の多い冬めいてきた感じとそれに伴って起こる望郷の念の取り合わせが微妙であり、「聖誕樹（クリスマスツリー）」の句も「バス小忙しき」で繁華街の様子を描き出している。「小涼しき」「小重さ」「小忙しき」などの独特の語法は、亀岡岳水の句会への出句にもあるが、この後の黄靈芝の句にしばしば出てくる。

「藤は午に金環蝕は地に……」の句も意味が分りにくいが、「午」は「天」の誤りかもしれない。そうだとすれば藤と金環蝕の対比が天と地の対比になって意表を突く。「蚊遣りして」の句は、小説の一節を思わせる構成である。「簾卷く」の句も年寄は黙っているしかないのだという諦めの様子が、所作に表されている。

掲載号を見ればわかるように、『雲母』への投句は初めのうち継続していたのが、その後だんだん間遠になっていった。この間の事情を黄靈芝はこう書いている（括弧内は引用者の付加）。

外国人の投句が珍しかったせいか、当初から二句選を頂いたが、

やがて（一回だけ）三句欄になり、次のやがてで一句欄に落ち、「俳句とは何か」という大問題が岸壁のごとく私の前に立ちはだかっていた時代である。……このことは……民国政府の喜ぶところではなかった。政治と関係のない私の大切な『雲母』はしばしば没収され、なしのつぶてしか届かなくなるに至り私は余儀なく『雲母』を去った<sup>24)</sup>。

『雲母』への投句がなかなか採ってもらえないので悩んだことは、黄靈芝の俳句観を深めた（独自の句風の形成に寄与した）のではなからうか。その意味で黄靈芝句の源流は『雲母』にあるとも言えよう。これ等の句想の特徴を一口にいえば「ひねった句」、神経の行き届いた繊細な言葉遣いと、人生の一環を思わせるような内容の豊かさではなからうか（人事句は決して多いとは言えないが）。これは靈芝が当時、生来の病弱で余命いくばくもないとの思いが常にあり（実際には87歳の長寿を保ったのだが）、文芸としては他に短歌や詩、更に小説をも手掛けていたこととも関係があるように思われる。それが日本語文学へと徹底させることにもなったのであろう。ことに「寡に慣れて古花器の佝僂に春惜しむ」、「世に破れ巷に鬪魚の性を愛づ」、「人妻の哀歎ほのか遠花火」、「転生を泣いて論して夜半の凍て」なども小説の一節を連想させる。病苦・人生の挫折・宿命・死など若き日の靈芝の苦悩を映した句が多いという点で、詩や短歌・小説と通底するものがあるといえよう（特に『黄靈芝作品集 1』の「蟹」、『黄靈芝作品集 2』の「暮の恋」（短歌小説）や多くの詩など）。

黄靈芝への雲母ないし主宰・飯田蛇笏の影響はどのようなものだったのだろうか。蛇笏の句も初期には小説的趣向、あるいは主観客観の合一などの傾向があったとされる。靈芝が投句していた晩年の蛇笏にはそうした傾向はなかったようだが、靈芝の初期の句に見られる傾向をある程度認めてくれたのかもしれない<sup>25)</sup>。しかし彼が実際に句会に参加して学んだのは、ほとんど「相思樹会」だけではなかったろうか。『雲母』は投句して選句を受けるだけである。いずれにせよ、これだけの経験では「俳句修行」として決して十分とは言い難いだろう。靈芝として見れば、もっと「相思樹会」のような俳句会に参加し、更に『雲母』に投句を続けたかったであろう。だがその靈芝がやがて、俳句会の会長になる事態



に遭遇するのである。

#### 4. 「台北俳句会」誕生のいきさつ

——「台北歌壇」と「七彩俳句会」との関係——

戦後台湾における日本語短詩の復活・サークル誕生のさきがけとなったのは短歌である。孤蓬万里（本名・呉建堂、1926-1998）をリーダーとし、まず「からたち支部」として発足、1967年に「台北短歌研究会」として独立し、翌1968年歌誌『台北歌壇』が創刊されると、それが結社自身の名称にもなった（そのためよく結社も1968年創立と誤解される）。『台北歌壇』が刊行されると、黄靈芝は早速入会したとみられる<sup>26</sup>。なお「台北歌壇」は2004年より「台湾歌壇」と改名している。

既に1950年代末～1960年代初めころから、日本に帰国した歌友との連絡がつくなどして、日本の短歌結社に投稿する台湾歌人が出始めていた。呉建堂の先輩にあたる呉振蘭（1912年生まれ、旧制・台北帝大附属医専部卒）は、戦前期末、小林土志朗（本名・敏郎）の『南台短歌』に参加したが、戦後は小林が帰国先の仙台で『南台短歌』の後身として始めた『短歌新生』に参加していたようである。呉振蘭は「魚群追ふ鷗の群が朝風の海を変速しつつ飛び行く」の一首を1965年の宮中歌会始に詠進して入選したのである。これは1860年以來の宮中歌会における二人目の外国人の入選ということで、一躍有名となった。呉建堂（孤蓬万里）によれば台湾から入選したのは後にも先にもこの一首だけであり、この呉振蘭の歌会始入選が、戦後台湾短歌界に与えた起爆剤の影響は計り知れない。呉建堂は「これに勇を得て……《台北歌壇》を発足させた」のだという（これは正確には「台北短歌研究会」のことであろう<sup>27</sup>）。

いっぽう「台北俳句会」は、台北歌壇にやや遅れて1970年に創立された。会長は創立以來黄靈芝で、彼の逝去まで変わっていない。この句会の発足は「台北歌壇」からの派生という数奇な経緯をたどっている。黄靈芝はこう述べている。

二十歳の時に病床で書いた死をテーマにした小説『蟹』を二十年後に改めて中国語に翻訳し、『台湾文藝』誌に発表したところ、第

一回呉濁流文学奨というのを貰ってしまった。これが縁で私は誘われ、呉建堂氏が主宰する日本短歌の会『台北歌壇』に入会した。多分一九六九年頃だったと覚えるが、翌年の夏（1970年6月）に、アジア・ペンクラブの会議が台北で挙行され、日本から川端康成氏を団長に中川与一（作家）、五島茂夫夫妻（短歌）、東早苗（俳句）ほか文芸や学術関係の方々がいらっしやった。当時の戒厳令下でのこの種の国家的行事は常に政府の御用作家が優先して招かれたから、その行事の後に私たちの台北歌壇が内々にお招きし、翌日だったかに私が命じられて故郷の、小さいながら台湾の古都台南へご案内した。その汽車の中で台湾にも俳句の会がほしいという話が湧き、帰北のあと俳句の運座をした。これが台北俳句会発足のはじめである<sup>28)</sup>。

東は「発表する場がなければ『七彩』を提供するから」とも言ったようである。「俳句の運座」とは同年6月24日夜「国際ホテル」で開かれた「東早苗先生歓迎俳句会」のことと思われる。ここには東のほか15名が参加しているが、うち12名が呉建堂を始めとする台北歌壇のメンバーであった。東が主宰する俳誌『七彩』の1970年11月号には、この時参加した呉孤蓬（呉建堂）・葉七五三江・林妙子・高橋郁子・陳秀喜・香山京月・蕭慶賢・巫永福・張清瑛・郭水潭・黄靈芝・北条千鶴子の12名の俳句が掲載されている。掲載された句の数は、筆頭の呉孤蓬が5句、末尾から二番目の黄靈芝が4句で、他は2～3句ずつであった。（なおこの前日の6月23日にも淡江文理学院主催の「東早苗先生歓迎俳句会」があり、参加者は東のほか15名だが、その中に黄靈芝・郭水潭・陳金定と、やや遅れて台北俳句会に参加することになる呉莊月娥の4名が含まれている）。

台北俳句会の創立が1970年7月とされるのは、この「歓迎俳句会」の翌7月から毎月句会が開かれるようになったためであろう。これは必ずしも東早苗が「台湾に俳句会を作らせた」わけではなく、黄靈芝らも以前からそういう意向をもっていたので、東の申し出を受け入れたということではなかろうか。巫永福は「指導的俳人に今迄接したことのない私が、去年初めて東先生に接し、先生から俳句の火をともしられた事は不思議な機縁である」と書いており<sup>29)</sup>、黄靈芝はもちろん、他の台北歌壇

会員にとってもそれなりに、東との接触が俳句も詠もう、という内発的契機になったと思われる。

だが台北短歌研究会（台北歌壇）にせよ、台北俳句会にせよ、創立当初は戒厳令下であり、「台湾」を名乗ることは避けなければならなかった。この点について呉建堂は「実際は《台湾歌壇》であるが、創刊当時《台湾》の二字を冠すると《台湾独立》のイメージがあって中華民国政府の忌避に触れるおそれがあった。また《中国歌壇》とすれば、日本の中国地方あるいは中国大陆と紛らわしい。それで《台北歌壇》としたのである」と言っている<sup>30)</sup>。少し遅れて発足した「台北俳句会」も、小人数ながら会員は台湾全島に跨っていたが、全く同様に「当時《台湾》の二字には反国思想の嫌疑が<sup>まこと</sup>羨しやかにかかけられやすかったため、殊更にこれを避けた」と黄靈芝は言っている<sup>31)</sup>。また彼の最初の著作『黄靈芝作品集 1』（私家版、1971年）は、日本語で小説を発表することに対する弾圧を非常に警戒したのだろうか、奥付を見ると、肩書の「笠同人」（新詩・中華民国）、「台北歌壇会員」（短歌・中華民国）など、印刷所まで「中華民国・台北市」とことさらに「中華民国」を強調している。これも「台湾」使用の忌避と重なるものであろう。1994年に創立された「台北川柳会」も、戒厳令解除後であったにもかかわらず、会員7名と小人数で発足したためか、やはり台北を名乗っていた。

これに対して呉濁流によって1964年に創刊された『台湾文藝』は、同じ年に創刊された『笠』と並んで中国語を創作言語としているが、やはり台湾の二字を使うと公安の干渉を招くのではないかという疑義が出された。しかし呉濁流は、目的とするところは台湾本土の文学を育てることなのだから、台湾の二字を使わなければ雑誌をやる意義もないとがんばって、『台湾文藝』の誌名に決まったという<sup>32)</sup>。同じような状況にありながらこういう対照的な反応が生まれたのは、やはり創作言語を日本語とするか中国語とするかの違いに大きく関わるのではなかろうか。

なお台北川柳会は2002年11月、百回目の句会を記念して「台湾川柳会」と改称し、台北歌壇も2004年より「台湾歌壇」と改名した。台北俳句会は今日に至るまで依然改名していないが、これは弾圧を恐れるような政治的なことではなく、別に相当の理由があったためである（内部事情でもあり煩わしいのでここでは触れずにおく）。

ところで、台北俳句会の誕生の契機ともなった『七彩』はどんな俳句

結社だったのか。東は七彩社の創立の経緯を次のように述べている。

一九六二年、国際大学婦人連盟、第十四回国際会議がメキシコ市で開催された時、私は日本代表として出席し、その際はからずもメキシコ唯一の俳句結社である在墨日本人俳句グループ、「国歌の集い」の同人達によって歓迎会を催して貰った。このことは当時の朝日新聞に「メキシコの俳句」として掲載されたが、その後俳句を通じて知り合ったニューヨークの、俳句研究家レニー・コーヘン女史の家に滞在、俳句に関心を持つ多くのアメリカ人を知り、その間色々感ずるところがあって、帰国後直ちに私自身の俳句理念に基づく「七彩」を創立した。その主張するところは、有季定形の伝統俳句の道を遵守すると共に、新鮮な現代感覚をとおして、新しい境地の開拓を目指すものであり、又随筆、エッセーにも重きをおく。一面俳句をと<sup>ママ</sup>として交流を得た、世界の詩人のプロフィールをも紹介し、併せて国際文化交流の一助にも資せんと念願するものである<sup>33)</sup>。

1962年に創立された『七彩』の精神は、次の四項目だった<sup>34)</sup>。

「七彩」は有季定型の伝統俳句の道を遵守するとともに、俳句の骨格に新鮮な現代感覚を吹き込みそれを表現することを目的とするものであります。

「七彩」は女流俳人のみによる研究集団であり、すぐれた女流俳句作家の育成を志す真摯な場であります（外国はこの限りにあらず）。

（第三項省略）

「七彩」は俳句を広く国際広場へ進出させることにより、世界平和に寄与することを念願とするものであります。

『七彩』は俳句の国際化に関心があり、台湾に支部を作ることに熱心だった。本来「女流俳人のみによる研究集団であり、すぐれた女流俳句作家の育成を志す真摯な場」だったのだが、台湾に進出するために「外国はこの限りにあらず」とわざわざ例外規定まで設けたのである。主宰の東早苗は当時「台北支部」を「一粒の種」と宣伝していた。

台湾に始めて俳句の会が誕生した。それは本年六月、台湾ペンクラブの主宰による、第三回アジア作家会議に私が出席したことが、一つのきっかけとなった。(中略)

もともと台湾は日本とは距離的に非常に近く、かつて半世紀の長い間手をつないできた間柄であり、日本の統治時代に教育を受けた四十五才以上の人達は、日本語を上手に自由に使っている。その台湾に俳句を作る人がいないと聞いて、私は内心驚きもし不思議にも思った。

俳句がアメリカやヨーロッパでたいへんな関心をもたれている現在、何故日本の領土でもあった台湾に、俳句が育たなかったのだろうかと思う。それには色々が理由があるだろうが、その一つとして戦後国情が一変し、台湾島が中国に復帰し、日本の文化人が引あげたため、日本文化とのかかわりも弱まり、俳句なども指導者が得られず、その芽生えもすこやかな生長を見なかつたのであろうと思われる<sup>35)</sup>。

「七彩」主宰の東早苗が「台湾に俳句会も作るように」と黄靈芝にすすめたことが、台北俳句会形成に一定の寄与をしたというのは確かだが、そもそも東が作ることを期待したのは「七彩台北支部」だったように思われる。台北俳句会が発足すると、黄靈芝はじめ相当数の会員が『七彩』へ投句を開始しており、同誌に「台北俳句会七彩支部作品」という欄が他の投句欄とは別に設けられるようになる。これは台北俳句会とは独立した集まりとして「台北俳句会七彩支部」があったという意味では必ずしもなく、個々の会員にとっては「台北俳句会」独自の発表機関誌はないが、七彩に入会して「支部」の会員になれば『七彩』に句を掲載してもらえる、という意味だったであろう。なお当時の『七彩』は月刊ではなく、B5版の季刊誌で、それもほとんど年三回の刊行であった(1975年からA5版に変わったが、発行頻度は変っていない)。

巫永福が「短歌は数年前からからたち台北支部があり、この集いが日を違えて七彩の集いになった」といっているように、そもそも「台北歌壇」と「からたち台北支部」とが重なっており、それが「台北俳句会＝七彩台北支部」とまた重なっていた<sup>36)</sup>。その重なり具合をしてみよう。『七彩』1971年3月号の「台北支部」欄には同年11月に刊行された『台

北俳句集 1』の投句者 25 名の内、会長の黄靈芝を含めて 17 名の名が記載されている。また「台北支部」欄にないが、他の欄に投句が掲載されている会員が 3 名いるので、全部で 20 名が『七彩』に投句していたことになる。25 名中の約 8 割が『七彩』と「重なって」いたわけである。つまり若干の「はみ出し」はあるにしても、「からたち台北支部」・「台北歌壇」・「台北俳句会」・「七彩台北支部」は大部分のメンバーが相互に重なりあっていた時期があった、ということである。

こうして黄靈芝は「相思樹会」の句会で数年間鍛えられ、『雲母』への投句で句観を形成し、台北短歌研究会を基盤に『七彩』台北支部の形で発足した台北俳句会で、いよいよ本格的に組織的な俳句活動を開始する、という経過をたどったのである<sup>37)</sup>。戦後台湾俳句を代表する黄靈芝句の登場である。

## 5. 「台北俳句会 = 七彩台北支部」会員の詠んだ句

最初期の台北俳句会員の投句は『七彩』誌上でどのように扱われたか。号によっても若干異なるが、会発足のほぼ半年後の 1971 年 3 月号で見してみよう。

『七彩』の句の載せ方は複雑だった。まず「七彩秀句」欄（全投句より一人一句ずつ全 20 句）が冒頭にある。「主宰作品」の次に「七彩同人集」があるが、これは台北俳句会員と関係がない。それから「飛火野集」（会員作品）・「雑詠」と続く（1971 年 7 月号と 12 月号には、この間に「星炎（集）」という台北俳句会員だけの欄もあった。この両号は台北からの投句が多かったので優遇されたものか）。最後の「七彩支部作品」欄には他の支部と並んで「台北支部」のセクションがあった。これらの掲載句は、その後相当数が台北俳句会の刊行した最初の句集、『台北俳句集 1』（1971 年）に（句によっては一部修正して）収録されている。ここにも「七彩」と「台北俳句会」との重層性が現れている。同時にこれ等の句は、発足当初の台北俳句会の「俳句力」を示す貴重な資料でもある。

まず「七彩秀句」に、台北からの投句としては、次の 2 句が選ばれている。

椿散る音の咫尺に夜の孤愁  
師走風潮騒のごと吹きぬけり

黄靈芝  
巫永福

黄靈芝と巫永福の二人は、この句会での指導的な詠み手であるように見えるが、二人の詠み振りには微妙な差がある。黄靈芝は漢語を配した微細な感覚と周到な言葉の組み合わせによって詩的雰囲気漂浮させているのに対し、巫永福は和語のみによる大ざっぱな比喻で短歌的な表現をしている。俳句としては「椿の散る音」と「夜の孤愁」を対比させた黄靈芝の句の方がやや上といえよう。巫永福（1913-2008）は郭水潭（1907-1995）らと並んで、黄靈芝よりずっと年長であるのみならず、戦前期から文学者として大きな実績があるうえ、短歌にも親しんでいる。台湾文学上のいわば大物の先輩であり、戦後台北歌壇への参加も巫永福の方が早く、黄靈芝は後から参入したこともあって、句会でも始めのうちは巫永福の方が長老格だったように思われる<sup>38)</sup>。しかし作歌に一步長じていたことは、必ずしも作句上プラスにはならなかったかも知れない。そのことに甘んじていれば、むしろ句作上マイナスの効果があったかもしれない。その点戦後の後発とはいえ、俳句中心に打ち込んできた「若輩」の黄靈芝のほうが、その詩的資質とも相まって、会長によりふさわしいと、次第に見られるようになったのではないか。

次の「飛火野集」では、五句入っている会員がいるのに対し、この二人は「秀句」に一句ずつとられているので、四句ずつであるが、句の詠み方が対照的であることは、「秀句」の場合とほぼ同じだといえよう。

炉火を目に

黄靈芝

山茶花のひそと年越す貸家符  
売られ行く穿山甲に年迫る  
夜の涯に金星かかげノエル果つ  
悔多し油をはじく炉火を目に

年迎ふ

巫永福

年の瀬や愛の渴きに花散れる  
金閣寺読みて擱きけり冬ぐもり  
時雨るるや後味残す宴あと  
吉祥の文字に明るく年迎ふ



花椿

蕭慶賢

賑やかに咲きし山茶花目に白し  
捨売りの師走の夜店客絶えず  
硫黄の香漂ふ冬の谷の宿  
花椿赤々燃えて野を飾る  
新年を祝ふ爆竹野へひびく

山寒し

林妙子

湯の香り淵にこもりて山寒し  
オリオンの頭上に杳き愛かへる  
向ふ山の落暉追ひかけ山下る  
裸木のトンネル透けり山落暉  
山椿寺の小路のみな白し

冬至粥

高橋郁子

相思樹林落ち葉に肥えて寒燃ゆる  
祈願せる人の人形温め持つ  
落椿点々赤き寺の庭  
白鷺城白玉椿忘れ得ず  
笑みこぼす師のまぼろしや冬至粥

冬の雪

北条千鶴子

雨寒し小耳に人の性残り  
人声のうつろとなれり冬うらら  
ビルにゐて寂寥と冬の海を恋ふ  
物提げてビルに雪くる空の色  
放心や路樹の末行く冬の雲

水仙花

陳蘭美

紅椿恋知り初めし黒髪に  
うらぶれの寂しさすするソバの湯気  
過ぎし夢たぐりつほぐすカーデガン  
ほかほかと上戸が囲む豆腐鍋  
未練断つ心にきよし水仙花

師走風

郭水潭

水仙をことさら好む娘を思ふ  
哀愁の黄色更けゆく夜の水仙

負債風吹きて師走の街の路樹  
路樹ゆする風も負債の年の暮  
身辺の多忙ゆすぶる寒の風

「飛火野集」の次に「雑詠」欄がある。この号ではトップが七句欄、次いで五句欄、四句欄となるが、ここまでは「台北支部」のメンバーの句はない。三句欄になると黄靈芝・林妙子・呂鵲城の句が入っている。続く二句欄には蕭慶賢・高橋郁子・巫永福・何千珠・王義雄ら計15名の句が載っている。二句欄に句の掲載されたのは全18名のうち3名の日本人を除く全員が台北俳句会員で、もう一つの「台北支部」欄の観がある。ここでは三句欄の、ただ一人戦前期からの俳人と見られる呂鵲城の句を挙げておこう。

霧うるむ路灯に歩き疲れたり                      呂鵲城  
肉粽子売る声星へ凍てし町  
がじまるの老根を垂り小春廟

二句欄からは次の4人の句を挙げておこう。

郵便夫の袋たわわに年の暮                      王義雄  
初めての句座にありけり菊に酔ふ  
あれこれの意欲たくまし日記買ふ              頼天河  
黄を吐きて葉のたわみける水仙花  
息白く豆腐売り行く朝の街                      張清瑛  
初咲きの水仙を子の瞳がとらふ  
初電話初往診となりにけり                      呉建堂  
山茶花や亡き人の声それとなく

このほかに「台北支部」欄に各4～2句ずつ17名の句が掲載されている（このうち黄靈芝の4句は全部『黄靈芝作品集 2』に収録されている）。

以上黄靈芝以下計13名の句を見て来たわけだが、彼等は初期台北俳句会の代表的なメンバーであり、台北俳句集の主要な寄稿者になってい

るから、ここで彼等の句の特徴を見ておきたい。まず台湾色のある句はやはり少ない。黄靈芝の句の「穿山甲」、蕭慶賢の句の「爆竹」、呂鵲城の句の「肉粽子」「がじまる」「廟」くらいである。この段階では日本の俳句会『七彩』の作法にしたがって作句しているはずなので、これらの語はいずれも季語の働きをしていないが、後に「台湾季語」が定められると、「穿山甲」「爆竹」「焼肉粽」「ガジュマル」「祖師廟祭」「関帝廟祭」などが季語となっている<sup>39)</sup>。そうなれば自ずから句作も異なってくる。

句の内容や形から見ると、会長黄靈芝の句は「花鳥諷詠」的な自然詠が中心で、形の上では切れと付きのある二章体句が主体である点で、『雲母』などを通じて学んだ日本の伝統的俳句を受け継いでいることが分る。林妙子や呂鵲城の句も一応これに準じているし、高橋郁子もこれにやや近い。それに対して蕭慶賢は自然詠が中心だが、句形は一物仕立てである。

いっぽう俳人という前に、文芸家である巫永福や郭水潭の句には人事詠が多い。これは短歌をよくする人の特徴であろう。巫永福は『台北俳句集 25』（1995年度の句集。1998年12月刊行）まで出句しているのに対し、郭水潭は『台北俳句集 6』（1976年度の句集、1977年1月刊行）までの出句で、早くも台北俳句会を去っている。この段階で見ると、巫が短歌的ではあるが一応切れのある二章体に近い句を多く詠んでいるのに対し、郭の句は切れのない、のっぺらぼうな一物仕立ての句が多い。台北俳句会への関与の長さは、二人の俳句の捉え方にも関わりがありそうである。

北条千鶴子・陳蘭美も人事詠に関心が深く、切れのはっきりしない一物仕立て句が多いのは、やはり短歌を基盤とした作家であるためといえよう。王義雄・頼天河・張清瑛・呉建堂は句数が少ないのでここでは触れずにおく。

## 6. 台北俳句会の「独立」

——『台北俳句集』の刊行と「七彩」との絶縁——

このように台北俳句会は「七彩台北支部」として活動を開始したのであったが、この「七彩」との関係は一年余しか続かなかった。やはり

「台北俳句会」と「七彩台北支部」との二重関係は不自然だったのだろう。台北俳句会側から見れば、「七彩」の支部であるということは、俳誌『七彩』に投句して選句を受けることであり、会長の黄靈芝をも含めて身柄を全面的に「七彩」に囲い込まれてしまった観があったのではなかろうか。黄靈芝によれば「乞食が施しを受けているような感じがした」という。彼は早くから「七彩を抜きたい」という意向を会員に漏らしている。「七彩」が性急に「台北支部」として包摂しようとした点に問題があったように思われる。

黄靈芝は1971年4月30日付のある会員宛の手紙の中でこういつている。

……句会は毎月の第二土曜に固定することに致しました。少し人数も増え、会は順調に育って居ります。(七彩支部の方は厄介な問題が後を断ちません。此の方は一年で何らかの形を変えることと思います。解散とか云うような、そんな予感がします)。七彩とは関係なく台北句会が続けられたら、と思っています(下線=引用者)。

これによれば、「七彩からの台北俳句会の独立」が黄靈芝の念願だったことがわかる。

台北俳句会が七彩から離れることになった原因のひとつには会費納入をめぐるトラブルがあったという。この事情を黄靈芝は翌年1月に自身の「七彩退会届」のコピーを添えて会員に伝達している。この通知は「七彩支部の皆様へ／本日、東先生より不愉快きわまる手紙を頂き、考慮の上、七彩を退会することに決意し、その旨申し送りました」で始まり、自身の「退会届」のコピーを添えている。「退会届」は長文だがその概要を記すと、此の度東早苗から「侮辱」といってもよいほどの金銭上の誤解を受けた。芸術上での誤解なら兎も角、金銭に関しての誤解はこれまで受けたことがなく、到底甘受し得ない。このような誤解を受けたまま七彩会員として留まるのは不本意だから「此の際きっぱりと退会させていただきます」として、国交のない日台間で送金するには、第三者には想像の付かないような厄介な事情があり、その中でこれまで自分なりに努力して来たのだと、『七彩』の会費納入が遅れてトラブルになったいきさつを綿々と述べている。日付は「一月三十日」とあるだけだが、

先の会員への手紙や、その後の『七彩』との関係の経緯から推測すると、1972年の1月30日と見るのが適切かと思われる。

このような書簡を実際に東早苗に送ったとすれば、台北俳句会と七彩との関係が解消に至るだろうことは容易に想像できる。ある会員は「(その結果)誰も句を送らなくなった。いわば喧嘩別れのような形だったけれど、それで台北俳句会がようやく(七彩から)独立したからよかったのではないか」といっている。このことは会員の『七彩』への投句の次のような変化から裏付けられる(二つ以上の欄にまたがって句の載っている人がかなりいる)。

1971年12月号：「飛火野集」2人、「星炎集」11人、「雑詠」16人、  
「台北支部」16人。

1972年4月号：「飛火野集」6人、「雑詠」3人

1972年7月号：「飛火野集」3人、「雑詠」なし。

1972年11月号：「飛火野集」なし、「雑詠」2人。

1973年4月号、7月号、10月号：台北俳句会員の投句なし。

まさに劇的な変化である。投句の減りだしたのは1972年4月号からで、まず「星炎集」と「台北支部」がなくなっているが、この二つの欄は事実上台北俳句会員中心の投句欄だったから、これだけでも「七彩離れ」は明白である。1972年に入ると『七彩』に投句する会員が激減し、1973年からは皆無になったのだが、黄靈芝は1972年11月号の「雑詠」まで欠かさず投句していた。これは東の選句自体は信頼していたということであろうか、それとも一種の政治的配慮であろうか。いずれにせよ、台北俳句会はこうして「七彩台北支部」というしがらみから抜けることになったのである。そうなった本質的な原因としては、やはり会費納入問題以上に、一種の植民地支配を受けているような感のあったことのほうが大きかったのではなからうか。

その後、私的に投句したり、日本を訪問した際に「歓迎」されたりした一部の女性会員(例えば「台湾省県会議員」の呉莊月娥など)はあったが、台北俳句会の動向とはもはや無関係だった。ある会員の言ったように、「七彩」と手を切ることで台北俳句会の自立性・独立性は高まったといえよう。

七彩側の反応はどうだったのだろうか。「七彩台北支部」の盛んだったころ、東早苗はこういていた<sup>40</sup>。

……新しい会員が増えつつあることは喜ばしい現象で、既に前号で御紹介した、訪台の時に蒔いた一粒の種が、漸く春の陽ざしを受けて、美しい緑の芽を出し初めたこととございます。良き成長を祈っております。

その「芽」のなかには男性俳人がかなりいたわけであるが、1972年7月号では、「女流俳人」「女流俳句作家」に限定するという巻頭言の第二項から「外国はこの限りにあらず」という但し書きが削除されている。偶然かもしれないが、あたかも「台湾との縁が切れたので、今後男性の投句はなくなるだろうから、従来どおりこの句会は女性のみ限定する」と宣言しているかのようである。実際これに応ずるように、この号以後同誌への台湾側の僅かな数の投句・投稿者は、(黄靈芝を唯一の例外として)女性だけになる。さらに、やや後のことだが、『七彩』1978年1月号の「七彩年表」の「(昭和)四十五年」の項では、「七月ソールにて開催された第三十七回国際ペン大会に出席、山中夏期大学にて《台湾、韓国》について講演」とあるのに、六月に台湾ペンクラブに招かれて訪台したことについては全く触れていない。期待した「一粒の種」は結局実らなかった、という思いがあったのかもしれない。

しかし「退会」はしても、その後も黄靈芝は東に対する儀礼をなお失っていなかったように思われる。黄靈芝は最後まで『七彩』に投句していたメンバーの一人であり、『七彩』1972年4月号には「七彩十周年をお祝いして」という文を寄せている。また黄靈芝は、東が1973年11月に「第二回世界詩人大会」で再び台北を訪れた際、会員の高橋郁子と共に東を出迎えている<sup>41</sup>。これは先の会員宛の通知で「たとえ、東先生の人柄がどうであろうと、私は彼女の俳句作品の文学性を高く評価する者であります」と言っていたことの現れかもしれない。

いっぽう句会発足の一年後、1971年10月に『台北俳句集 1』が刊行された。いまだ七彩の傘下にあったわけであるが、句会としての独立した発表機関ができたわけで、私家版ながらこの句集の刊行は会の自立ないし独立に大きく寄与したのではなかろうか。なお『台北俳句集』は、

台北歌壇（台北短歌研究会）から、年四回刊行されていた『台北歌壇』とは別に年一回刊行されていた『台北短歌集』とその体裁も編集方針もよく似ている。ただし台北俳句会は俳句集を刊行してきただけで、『台北歌壇』（現・『台湾歌壇』）に相当するような機関誌（俳誌）をこれまで出さなかったことが、台北歌壇（現・台湾歌壇）との大きな相違点である。したがって、台北俳句会の活動は、この『台北俳句集』（2017年5月現在第44集まで刊行済み）を主要な資料として捉えるべきであろう。

## 7. 俳句会の弾圧・いやがらせ

台北俳句会は「独立」したからとて、俳句会が平穩里に行われたわけでは必ずしもなく、次なる困難が待ち構えていた。初期の台北歌壇や台北俳句会は常々防諜人員に目をつけられる危険にさらされていたのである。黄靈芝は次のように言っている<sup>42)</sup>。

当時の法令として凡ゆる会合はそれが十人を超す場合、事前に警察に届けることを要した。また凡ゆる組織は登記を経てはじめて活動ができた。日本語による文芸の会が登記できるはずは必ずやなく、むしろ危険人物が自首してきたことになり兼ねないので、私たちは常に島原のキリシタンのように蠢いた。何しろ一頃、私はその筋の友人から何度となく忠告を受けていた。「君は今に掴まる」「必ず掴まる」「覚悟はしておいた方がいいね」「なぜなら僕が密告しているからだ」。彼に言わせると職業柄密告せざるを得ないのだという。その代わり私が掴まったら助けられるだけは何とかしてくれるそう。……そんなわけで句会に赴く時、私は短刀を一本鞆に入れていた。鬨り者にはされたくなかったし、会員の誰彼に手を出すものがあったら飛びかかるつもりだった。

俳句会が「相思樹会」のように、在台日本人が行っている俳句や短歌の会に台湾人が参加するというような形であったなら、あるいは『七彩』のような日本の俳句結社の「台北支部」としての活動であるのなら、こうした弾圧（実態はむしろ「いやがらせ」に近いように思われる）を受けずに済んだかもしれない。黄靈芝の回想にあるような事態は、台北



俳句会が『七彩』から独立した「台湾人による日本語文芸活動」になることによって表面化したものかもしれない。

さらに、日本語での短詩活動に対する抑圧は、日本語禁止政策そのものというより、むしろ台北歌壇や台北俳句会発足後の1972年9月に日中国交正常化されたことの影響の方が大きかったように思われる。これによって台湾では一時期反日感情が高まり、タクシーの日本人乗車拒否とか日本製品不買運動などが起こり、日本語不使用の機運が高まったからである。黄靈芝は次のように言っている<sup>43)</sup>。

日本は……いち早く中華人民共和国との交流をはじめ、やがてその国体を承認し、同じ穴の貉になりさがりやがったのであるから、敗軍の将は牙を剥き、天に向かって咆哮するしかなかった。そのとばっちりが何時こちらに飛んでくるかわからない、そんな時代での日本語であり、私たちの会の発足でもあれば運営でもあった。殊に俳句は省略だらけの文芸であり、日本語のベテランをもって任ずるその筋の係官にしても、何やらの暗号をもった秘密結社の組織に私たちの俳句会がみえていなかったとも限らない。私たちの月に一回の月例会にも時折見知らぬ紳士がきて坐っていることがあり、何を尋ねても答えてくれない唾の人であった。

最初期からの会員の一人によれば、その筋の目が光っていたので、句会の場所もしばしば変わったようである。10か所近く変わったという。一時期は黄靈芝の自宅で句会をしたこともあったらしい。10人以上集まる時には警察への届け出が必要だった時代である。会員のなかに一人、誰かはわからないが「お目付け役」がいたことは確かだという。「よくやってこられたものだ。私自身公務員だったのに、(日本語俳句活動に参加するなど)随分大胆だったと今にして思う」とこの会員は回想している。

これは台北歌壇も同様であった。当局を刺激しないように、という点では台北歌壇の主宰・呉建堂も非常に神経を使っていたようである。会の名前に「台湾」を使わないだけでなく、会員が「台湾」を詠み込んだ歌を作ることさえ呉建堂は許さなかったという<sup>44)</sup>。またその頃黄靈芝は毎月台北歌壇にも出席していたので気が付いたのだが、呉建堂は時々自国台湾政府を妙に褒めていたという。これも一種の保身の術だったので

あろう。これに相当する黄靈芝の対応は、自国政府を褒める代わりに「政府が忌々しく思っているに違いない、敗戦国のくせに戦後をいつよりか世界の檜舞台にのっそと姿を現わしはじめた日本の、またはその文芸の《粗さがし》をしては文に書いたりしてきた」というものであった<sup>45)</sup>。『台湾俳句集』の「あとがき」に時にみられる、日本語や俳句を揶揄したかのような黄靈芝の「俳句論」も、あるいはこの意図的な「粗さがし」の一つだったのかもしれない。こういう状況であったから、台北俳句会でも台北歌壇でも、政治に関らないよう細心の注意を払っていた。会のなかに政治を持ち込まない、政治の話をしなないのは当然のこととされた。こういう状況下では俳句会の存在を公に宣伝することも必然的に憚られた。口コミによる以外、句会の活動を知らせる方法はなかった。発足後初めの数年間（『台北俳句集 5』くらいまで）、会員がほとんど増えていないのはそのためだったかもしれない。

しかし1980年代に入ると、台湾は高度経済成長期を迎え、日本との経済・貿易の交流はますます盛んになった。日本企業の台湾進出が増えると、日本語の需要も高まっていった。台湾の俳壇や歌壇の発展も、こうした動向と無関係ではなかったであろう。参考までに、初期の『台北俳句集』の投句者数を挙げると次のようである。

- 『台北俳句集 1』（1971年10月）25名
- 『台北俳句集 2』（1972年10月）24名
- 『台北俳句集 3』（1974年1月）29名
- 『台北俳句集 4』（1975年1月）28名
- 『台北俳句集 5』（1976年1月）25名
- 『台北俳句集 6』（1977年1月）29名
- 『台北俳句集 7』（1978年2月）30名
- 『台北俳句集 8』（1979年2月）38名
- 『台北俳句集 9』（1980年2月）47名
- 『台北俳句集 10』（1981年4月）57名

このように、台北俳句会は発足したものの、その前途は多難であった。それは「日本語の抑圧」のような外的な要因だけでなく、さらに短歌と俳句との内面的かわりのような、台北俳句会自身に内在する本質的な

問題があったからである。この点については、戦後台湾俳句の性格の根幹にかかわることなので、回を改めて論ずることにしたい。

(未完)

## 註

- 1) その外短歌では「たんがら」「龍の会」「コスモス台北支部」、俳句では「春燈台北句会」などの小規模な会が生まれ、中には既に消滅した会もあるが、本稿では触れないことにする。なお「春燈台北句会」は別稿で論ずる予定である。
- 2) この点については拙論「日本統治期台湾中等学校における周辺文化としての短歌」『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』課題番号 23330229、独立行政法人日本学術振興会、平成 23 年度～25 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書（研究代表者 佐藤由美）、2014 年 3 月、107-126 頁参照。
- 3) 陳培豊「《異心同体》の漢民族ナショナリズム——植民地解放後、台湾の国語転換の場合」『言葉と社会』5 号、三元社、2001 年 6 月、101-102 頁。
- 4) ただし官庁の統計上の「日本語を解する者」と「実際に日本語を話せる者」とは一致しない。国語講習所に通っただけで統計上は「国語解者」とされているが、一年間講習を受けても日本語が一言も話せなかったような例がある。周婉窈『海行兮的年代——日本統治末期臺灣史論集』2003 年、99-100 頁。（原文、中文）
- 5) 前掲陳培豊「《異心同体》の漢民族ナショナリズム——植民地解放後、台湾の国語転換の場合」107 頁。
- 6) 呉濁流『夜明け前の台湾』、台北・学友書局、1947 年、15-18 頁。
- 7) 前掲陳培豊「《異心同体》の漢民族ナショナリズム——植民地解放後、台湾の国語転換の場合」109 頁。
- 8) 黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』私家版、1998 年、134 頁。なおこの「あとがき」は、『燕巢』日本・豊中市、1998 年 1～2 月号、『黄靈芝作品集 18』私家版、1990 年、『台湾俳句歳時記』東京・言叢社、2003 年にもほぼそのまま収録されている。
- 9) 蔡茂豊（2004）「台湾における日本語教育の歴史的変遷」『アジア遊学・69・台湾から見る日本』勉誠出版、192-194 頁。
- 10) 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情——台北の日本語文芸活動について」、橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』、大阪・清文堂出版、2003 年 3 月、123 頁・124 頁及び 130 頁以下。
- 11) 前掲陳培豊「《異心同体》の漢民族ナショナリズム——植民地解放後、台湾の国語転換の場合」111 頁。

- 12) 藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998年、64頁。
- 13) 孤蓬万里『台湾万葉集・続編』集英社、1995年、385-390頁。
- 14) 黄靈芝は「台南二中」（主として本島人＝台湾人のための学校）ではなく、「台南一中」（日本人＝内地人のための学校）に入学したのだが、「台湾人のくせに日本人の学校に入った生意気な奴だ」と上級生のリンチに遭っており、のち休学している。戦後台南一中は閉鎖され、台南二中に編入されたが、黄靈芝は学校に行かなかったというから、台南二中は卒業していない。それにもかかわらず大学には入学できたというあたりが面白い。
- 15) 黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』私家版、1998年、137-139頁
- 16) 岡崎郁子『黄靈芝物語』（研文出版、2004年）の「黄靈芝年譜」（268-269頁）による。
- 17) この言語の切り替えは、しかし容易なことではなかった。この切り替えに苦しみ、あたら才能を発揮することもなく生を終えた人も知られている。文学者たちも例外ではなかった。彼らが言語の切り替えに苦しんだ理由のひとつとして、彼らの第一言語（母語）である閩南語あるいは客家語が、同じ中国語の方言だといっても、北方語を基礎とする国語（白話文、標準語）とは、ほとんど外国語といってもいいほどに異なっていることが挙げられる。それと大陸における国語の形成、発展の過程から、台湾が切り離されてあったことが、日本語の問題をより重大化させ、言語の切り替えをより困難にしたと考えられる。（松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第119巻第3号、1998年3月号、333-334頁）。
- 18) 黄靈芝「そういえばそうかもねえ——ある日文台湾作家がいうのには」、『国文学』学燈社、2006年8月号、63-64頁。事実、彼の著作集は、日本で刊行された『台湾俳句歳時記』を除き、すべて私家版である
- 19) 前掲黄靈芝「そういえばそうかもねえ」64頁。もっとも岡崎郁子は「台湾人をないがしろにした政府の圧政がなければ、また日本語が禁止されることがなければ、黄靈芝は日文での創作ははじめなかったのではないかとさえ思う」と若干ニュアンスの異なる指摘をしている（前掲岡崎郁子『黄靈芝物語』、144頁）。
- 20) 前掲黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』、150-151頁。なお黄靈芝は同趣旨のことを、既に『台北俳句集 8』（1979年）の「あとがき」（89頁）で次のように述べている。「……言語や文字は文芸にとっての道具にすぎない。もし道具が本質を左右し得るほどの力をもつものならば、梅原龍三郎の絵はフランス美術であり、ベートーベンのピアノ曲はイタリア音楽である。……文芸もまた、他のもろもろの芸術と同じく、国境をもたないことを知るべきである」。
- 21) 戦前期台湾を代表する俳句結社『ゆうかり』の会員。『ホトトギス』雑

詠欄にもしばしば名が見える。帰国後俳句結社『山茶花』の二代目主宰となる。

- 22) 前掲黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』、139-140 頁。
- 23) 亀岡嶽水「台湾旅行記（第二信）——南部行程より——」の末尾に付された「相思樹会のことども」（『雲母』1955 年 10 月号）。
- 24) 前掲黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』、140-141 頁。
- 25) 黄靈芝の入会当時、雲母主宰の飯田蛇笏はまだ健在だった。蛇笏は靈芝の入会した 1956 年には第八句集まで刊行していたが、1927 年に刊行した第二句集は『靈芝』（改造社）であるから、何か黄靈芝との因縁を思わせる。しかし蛇笏への師事の表明として、この第二句集に因んで「靈芝」という雅号にしたとわけではないらしい。雲母入会以前の亀岡嶽人の「歓迎句会」で、既にこの雅号が用いられているのである。靈芝の雅号の由来は依然謎である。
- 26) 前掲岡崎郁子『黄靈芝物語』270 頁。呉建堂は「氏は文学賞を得た際、故呉瀛瀾氏の紹介で「台北歌壇」の同人となった」と言っているが（前掲孤蓬万里『台湾万葉集・続編』392 頁）、受賞は 1970 年なので、その前に黄靈芝は既に「台北歌壇」会員になっていたとみられる。しかし「同人」になったことは、東早苗の台南旅行への案内役を命じられたことに関わりがあるかもしれない。そうだとすれば絶妙なタイミングである。
- 27) 前掲孤蓬万里『台湾万葉集・続編』集英社、1995 年、78 頁。
- 28) 前掲黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』、147-148 頁。なおこの時台湾側は、黄靈芝の外に高橋郁子が同行している。
- 29) 巫永福「会員だより」『七彩』1971 年 7 月号。
- 30) 孤蓬万里編『台湾万葉集』集英社、1994 年、346 頁。
- 31) 前掲黄靈芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』私家版、1998 年、148 頁。
- 32) 前掲松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」328 頁。
- 33) 東早苗「九周年をかえりみて」『七彩』1971 年 12 月号。
- 34) 『七彩』1971 年 3 月号「巻頭言」。
- 35) 東早苗「一粒の種——台湾の俳句——」『七彩』1970 年 11 月号。
- 36) 巫永福「会員だより」『七彩』1971 年 3 月号。なお巫永福は『七彩』1971 年 7 月号の「一つの報告」では、「数年前から短歌活動が《からたち台湾支部》を中心に始められ、最近では台北歌壇として成長し、すべて在住の人達だけで形成している。そして昨年からは俳句が七彩台北支部を中心に発足したが、面白いことである」と、もう少し丁寧に書いている。

- 37) 『黄霊芝作品集 2』(私家版、1971年)には俳句・短歌・詩が収められているが、俳句の中には『雲母』の句がかなり含まれている。これは『七彩』の句と並んで、初期の黄霊芝句の特徴ともなっている。
- 38) 『台北俳句集』の第1集から第4集(1975年1月刊行)まで、表紙の標題「台北俳句集」が署名入りで巫永福の筆になっているのはその象徴とも見られる(第5集以降はずっと署名なしで黄霊芝の筆に換わっている)。
- 39) 黄霊芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年、参照。
- 40) 『七彩』1971年3月号「あとがき」。
- 41) 高橋郁子「東早苗女史をお迎えして」『七彩』1974年2月号。
- 42) 黄霊芝「あとがき・戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台北俳句集 25』私家版、1998年、148-149頁。
- 43) 黄霊芝「台湾の俳句——その周辺ほか」『国文学』2005年9月号、学燈社、91-92頁。
- 44) ある台湾歌壇会員からの聞き取りによる。
- 45) 前掲黄霊芝「台湾の俳句——その周辺ほか」『国文学』2005年9月号、学燈社、92頁。

#### 附録：黄霊芝著作目録

- I 『黄霊芝作品集』(色を変えた同一体裁、巻8・17を除く全19巻刊行済、巻16以外は私家版)
- |     |                            |                              |
|-----|----------------------------|------------------------------|
| 巻1  | 小説集(蟹・古稀・法・「金」の家)          | 1971年1月1日                    |
| 巻2  | 詩集(俳句・短歌小説「墓の恋」・詩)         | アート紙使用<br>1971年10月1日         |
| 巻3  | 小説集(紫陽花・喫茶店「青い鳥」)          | 1972年5月1日                    |
| 巻4  | 評論・随筆・雑文                   | 1973年7月1日                    |
| 巻5  | 小説集(豚・床屋など5篇、仏文5篇)         | 1973年9月1日                    |
| 巻6  | 詩集(和漢俳句・短歌・自由詩・短歌による史話の四部) | 1982年1月1日初版<br>1986年10月22日再版 |
| 巻7  | 論文・小説(玉器論4篇と「台湾玉買傳」)       | 1983年3月1日                    |
| 巻8  | ——読者を必要としないものを集め公表しない——    | 刊行意図なし                       |
| 巻9  | 小説集(天中殺・蛇・毛虫など9篇)          | 1983年11月23日                  |
| 巻10 | 魚・文と童話(錦鯉の専門誌・月刊『鱗光』に掲載)   | 1984年2月1日                    |
| 巻11 | 論集「中国の神話と伝説」と「鑑裁」2篇        | 1984年7月4日                    |
| 巻12 | 論集「探討日本之漢字簡化」と「鑑裁」2篇       | 1986年4月15日                   |
| 巻13 | 論集「台湾の演劇」・翻訳1篇・鑑裁3篇        | 1986年12月1日                   |

- 卷14 民話（旧話・再話・新話・故事・寓言） 1987年10月25日  
 卷15 詩集（句集『その後』・歌集『あの頃』） 1990年12月1日  
 卷16 『台湾俳句歳時記』（東京・言叢社）を充当 2003年4月15日  
 卷17 ——美術作品集の予定—— 未刊行  
 卷18 論集（『台北俳句集』あとがきと『黄靈芝作品集』抜粋による俳句論）  
 2000年12月1日  
 卷19 小説集（董さん・仙桃の花・ユートピアなど8篇）  
 2001年7月1日  
 卷20 詩集・句集『蟬三〇〇句』（蟬だけ詠んだ俳句400句以上収録）  
 2003年12月31日  
 卷21 論集『年々…月々…』（台北俳句会の句評より） 2008年12月

- Ⅱ 『黄靈芝作品集』に含まれていない記念の著作（ともに私家版）  
 『候鳥（阿嬌）・靈芝（天驥）合同俳句集——紀念先父黄南鳴翁百歳冥誕特刊之  
 四』  
 1984年11月17日  
 （姉の陳黄阿嬌と黄天驥の共著、附録に「父のことども」と「あとがき」があ  
 る）  
 『黄靈芝小説選集——紀念先母黄郭命治夫人百歳冥誕特刊之一』  
 1986年10月22日  
 （『黄靈芝作品集』巻1・5・7・9の小説の抜粋。末尾にあとがきの「母のこ  
 と」）